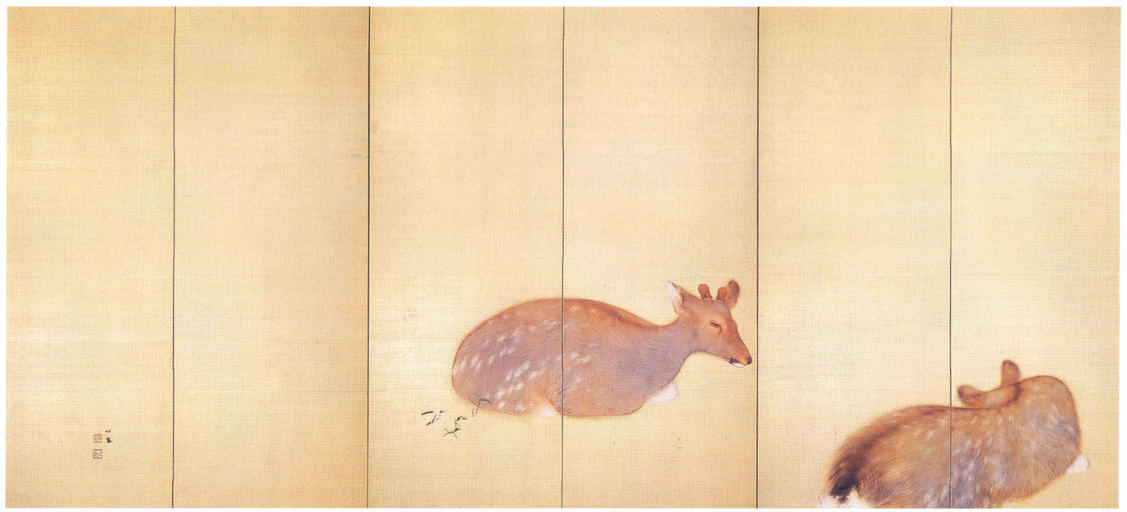
右隻



<参考>左隻

48　和暖

竹内栖鳳　六曲一双より右隻　大正13年（1924）
絹本着色　本紙162.4×354.0

京都府知事よりの献上。古来より、神、あるいは神の使いとして吉祥画に描かれる鹿を主題とする。若い雄鹿を中心に、穏やかな表情の鹿の家族が睦まじくたたずむ様子には、皇太子（昭和天皇）の将来が、子宝に恵まれ、末永く平穏であるようにとの願いが込められているのであろう。竹内栖鳳（1864～1942）は、山元春挙と同じ頃、京都画壇で活躍した画家で、伝統的な四条派の画風に西洋画法等を取り入れ、独自の画風を展開した。動物が好きで、その写生をもとに多くの作品を遺した栖鳳らしく、吉祥画題の鹿を、明るい金地に余計な背景を描かず、まさに画題そのままの穏和でほんわかと暖かさが伝わる画面に仕上げ、新鮮味溢れる吉祥図屏風となっている。　<展示　第3期-18>

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

祝（いわい）美（のび）— 大正期皇室御慶事の品々
三の丸尚蔵館第45回展覧会

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　野崎印刷紙業 株式会社
翻訳　横溝廣子
発行　宮内庁
平成十九年九月二十九日発行

©2007. The Museum of the Imperial Collections